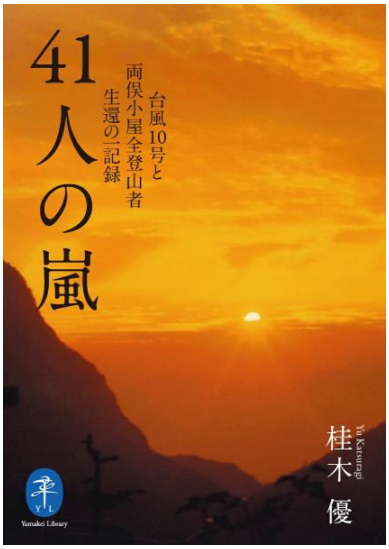
「41 人の嵐」台風 10 号と両俣小屋全登山者生還の一記録（桂木優　著）



1982年８月１日から５日まで台風１０号により北岳3193mの西、仙丈ヶ岳 3033m の南にある両俣小屋に閉じ込められた 41 人の生還記録だ。

１日。広河原では 800mmを観測したが雨量計の針がとんでしまい以後は観測不能となった。広河原では吊り橋が壊れ落ち、駐車場は土石流で埋めつくされ、駐めてあった 20 台の車は全て埋まった。林道は 164 ヵ所で寸断され、沢は大小問わず崩壊した。静岡の梅ヶ島、南アルプス青木鉱泉、早川町の西山温泉、奈良田温泉に続いて４日と５日には自衛隊のヘリが広河原に飛び 665 人が救出された。

両俣小屋は鉄筋の二階建て、約 12 坪の小さい小屋だ。テント場は三ヵ所ある。５張り５張り 30 張り。小屋番はこの小屋で二年目になる桂木優（本名　星美知子）だ。

７月 20 日頃に山梨大学のパーティーの一年生が体調を崩しショックを起こし小屋に担ぎ込まれた。このパーティーは即中止決定。下山し、大量の食糧を小屋に置いていった。ソーセージ 70 本・缶詰 10 個・米・インスタント味噌汁・ジャガイモ・人参等、この食糧が後で大いに助かることになる。

31 日の宿泊者は学生２人・単独者・三人組の計６人だった。彼らは雨が降る中８月１日早朝に広河原に下っていった。テント場の小平高校パーティーは激しい雨の中、10 時 30 分に下山開始し午後３時に広河原に到着した。そしてマイクロバスを呼んでもらい広河原を脱出した。そして中央線が不通になる前に東京に帰り着いた。

１日午後４時、テント場は夏合宿中の学生で賑わっていた。三重短期大学９人・愛知学院大学６人・新潟大学７人・同志社大学９人・九州からの二人組パーティーがテントを張っていた。しかし台風 10 号の接近により暴風雨になった。小平高校パーティーが下山していった時間をもって両俣小屋は孤立状態になった。

夕方、三重短期大学・愛知学院大学が避難してきた。新潟大学・九州からの二人組パーティーも小屋に避難してきた。残るは同志社大学だけだ。同志社大学が来ることを願いながら皆で宴会を始めた。差し入れのウイスキーが３本もあった。

10 時 30 分。小屋の 1m 先が濁流で流されていることに気付く。小屋番は全員に「みんな起きろ！避難だ。小屋が流される！雨具をつけ貴重品だけ持って裏山へ行け！」と指示を出す。11 時３分、33 人と小屋番は小屋を脱出した。靴を履いているとき、小屋に直径 1mほどの穴が空き濁流が小屋に流れ込んできた。三重短期大学の M さんが穴に落ちた。皆で賢明に助けだしたが靴を流された。小屋番は懐中電灯・傘 25 本・ラジオ・若干の食糧を持って脱出した。同志社大学のテントは不明だ。

長い夜が始まった。小屋から約 30 分歩いて登った裏山の平たい場所に枝や葉を折ってシェルターを造り、暴風雨の中そこで励まし合いながら夜を過ごした。

２日、空が明るくなり、小屋番は小屋の様子を見に戻る。小屋の一階が濁流に呑まれていた。８本のガスボンベは流されていた。二階は無事だった。シュラフや毛布もあり、食糧も残っていた。９時 10 分だった。一階にあった食糧も残っている。昨夜の宴会で作った鍋も残っていた。食糧を全て二階に上げ食事を取り、休息した。管理人はテント場を確認に行く。東北薬科大学７人のテントが埋もれていた。同志社大９人の

テントも埋もれていた。同志社大の９人と東北薬科大学７人は統一行動をし、全員無事で仙丈岳を抜け午後２時に北沢峠に到着する。

小屋に残った 25 人は起き出した。流された食糧やビールなどを探しに出かける。空はすっかり晴れた。濁流も弱くなる。

２日、午後９時。再び濁流が流れ始めた。鉄砲水が出始めた。もう台風は去ったのだが 3000mの山は甘くなかった。小屋の食糧はもう無くなりかけた。これ以上小屋に留まることは危険と小屋番は考える。「鉄砲水が引いたら小屋を出よう！」小屋番は皆に伝え、三重短期大学９人・愛知学院大学６人・新潟大学７人・九州からの二人組パーティーをワンパーティーに編成し直し靴を無くしたＭさんを守りながら仙丈ヶ岳を越え北沢峠まで行く。二日間に渡る濁流の危機の中、普通の人で二日かかる行程を一日で行くというハードな行動だった。

この本は若い登山者の勇気と小屋番の指示とチームワークの素晴らしさで台風の恐ろしさを乗り越え全員無事で生還した記録だ。

一気に読み切った。著者の星美知子さんは今でも両俣小屋の小屋番をしているそうだ。両俣小屋に行ってみたくなった。（フカ）

2024 年８月１日　「41 人の嵐」桂木優　箸　山と渓谷社　1210 円